

---

# 葵のただら日記。

はしくれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葵のだらだら日記。

### 【コード】

N6840A

### 【作者名】

はしくれ

### 【あらすじ】

だらだら日記ですよ、だらだら書くんであらだら読みましょう。

## 第2話・ソリが合わねエ編・

『生徒会執行部室』 ついに来た。ホントは来たくなかったけど。

俺は今、生徒会執行部役員のお活動場所である生徒会室の目の前にいる。

俺が奇しくも5・2の生徒会役員に選ばれてしまったのだ。生徒会役員は各クラス一名ずつ選出し、5、6年生を対象とする。つまり5、6年のクラスの数だけ生徒会役員が存在するのだ。各学年3クラスずつあるから、俺の他にも後5人生徒会役員がいるわけなんやケド……。

「こんなお堅い生徒会なんぞ好んでやるヤツとソリが合っわきゃねエよなア。」

そうして部室の扉の前で右往左往していると

ドンッ！

「うおッ！？」

「きゃっ！」

いきなり人にぶつかった。

「すすすす、すみスミ、スミマセン！あの、わたっ私。」  
「でもイイけど、いくら何でもり過ぎだろ。」

「あ、いや。俺もよく前見てなかったし。」

「本当に、スミマセンでした。」

そう言っただけでも頭を下げた後、彼女はようやく頭を上げた。

黒の三つ編みに眼鏡。古き良き時代の女版学級委員ってヤツだ。

(てかトロそ〜)

「あの、生徒会の方ですか？」

「えっ、あぁまア。これからなる予定の方ですケド。」

自分が生徒会執行部に就くのはもう揺るぎない事実なのだが、未だ納得出来ない自分がソレを受け入れようとしない。結果『予定』などどわけの分からない言い方をするハメに。

「あのっ私、5年1組より生徒会に選出された飯野宵子いいのよこと言います。  
よろしく願います！」

(よいこかよ！親はどんな脳ミソしてやがんだア。俺ならそんな名前つけられた日にゃあ自殺モンだぜ。)彼女には悪いが、お世辞にもイイ名前とは思えなかった。俺ならゴメンだ。

そうこう考えていると不意に生徒会室の扉が開いた

「アレ、誰アンタ達。」

いきなりヒドい言われようだ。

「あー、俺た・・・」

「あのあのツ私達生徒会に入りに来たんですツツ！」

(うるせー)

横からスゴい大声でよい子チャンが叫んだ。

「ああ、アンタ達が。何してんの？早く入りなさいよ。」

「ああハイ。」

ついに俺が生徒会室に足を踏み込む時が来たッ

「以上が本件についての草案です。あら、アナタ達は？」

生徒会室に入ると先輩だろうか、三人の人が中にいた。その内の一人が俺達に気付きこちらに振り返る。

「あ、ドーモ。」

ペコと頭を下げる俺を一瞥する瞬間、その人の目つきに苛立ちの色が浮かんだのを俺は見逃さなかった。

「君達は新しい生徒会役員かい？」

部屋の中央に設けられた長机(おそらく会議用だろうか)の上座にドカッとふんぞり返っている男が言った。おそらくこの人が俺らの学校の生徒会長だろうか。

「まあ適当に座りなよ。里沙。そろそろ始めようか。」「はい、会長。それでは皆、席について。」

俺達は各自空いてる席に座る。

「それじゃあ今から今季初の生徒会執行部会議を始めるよ。まずは新規メンバーへの自己紹介から始めようか。」

そう言うと会長は立ち上がって続けた。

「俺が今期の生徒会長に就任した、6 - 2 すがのゆじや菅野裕也だ。よろしく頼むよ。」

パチパチと周りから拍手が起こる。俺も何となくつられて拍手をした。

「私は副会長の6年1組、坂本里沙さかもとりさよ。宜しく。」  
パチパチ。

「6-3、青嶋史恵あおしまふみえです。宜しくね。」

以上3人が6年生。この人達が生徒会の幹部という事になる。

「それじゃ次はキミ達5年生の自己紹介をしてもらおうか。」

俺達は互いに視線を送り、誰が最初に言うか伺い合った。

「ハイッ！わた、私は、5年1組飯野宵子と言いますッ！よろしく！おね、お願いします！！」

（プツ、まアたどもってるよコイツ。）

「ハハ、こちらこそよろしくね。飯野。そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。リラックス リラックス」「はっハイ！！」

（オイオイ・・・）

「じゃあ次の人。」

「ハイ。アタシは5-3、藤原奈美です。よろしくお願いします。」

「藤原、君は元気がいいね。よろしく。」  
そして俺の番。

「あー、5-2から来ました。橋葵ス。よろしくドーズ。」  
ペコツと頭を下げる俺。

うん、よろしくと会長は言った。

「これから一年間、長いようで短い一年になると思う。その間、俺はこの学校を少しでも良くしていきたいと思っている。皆の力を貸してくれ、宜しく頼む。」

最後に会長が一年間の抱負を語った。

こうして俺は正式に生徒会執行部員になったのだ。

### 第3話・それぞれの理由編

「じゃあ明日の朝は8時に生徒会室に集合だよ。」  
会長が次の活動時間を指定する。授業が9時からなのに1時間も早く学校に来て朝から活動とはまったくメンドクさい。

「じゃあ今日の活動は終わりだ。皆お疲れ。」

会長がそう言い、今日の生徒会活動は終わりを告げる。

「葵。一緒に帰らない？」

(? 誰ダツケ、あつ藤原だっけか。つてかイキナリ呼び捨てかよッ)  
「何よ、キョトンとして。まさかいきなり呼び捨てされて馴れ馴れしいとか思ってたんじゃないでしょうね。」

「えっいや。」

図星をつかれてうるたえてしまう。

「ああイヤ！なんてみみっちい男なの。アンタねえ、少しは仲良くしようって気はないわけ!?!」

(いやいやいやいや、なんでイキナリみみっちいとかヒドクね?)

「なんとか言いなさいよ。」

「あ、ああ。じゃ帰るか。」

「それでヨシ。宵子ちゃん！アナタもどう、一緒に帰らない？」

「えっ!?! わたっ私ですか。はっハイ、是非!?!」

まさか誘われるとは思ってなかったのか、宵子ちゃんはビックリしていた。

「じゃあ行くわよ。」

何故かリーダー気取りの藤原に引き連れられ、俺達は帰路に着く。帰り道、不意に藤原が口を開いた。

「ねえ、アンタさあ。何で生徒会に入ろうと思ったわけえ? どう見てもボクやります! ってタイプには見えないんだけど。」

「じゃどういうタイプに見えるんだよ。」

俺は少しはムツとしながら答えた。

「大抵の事はめんどくさがって人に押し付けるタイプ」  
ケラケラと笑いながらトンでもない事を言う藤原。よくもしゃーし  
ゃーと失礼な事が言えたもんだ。

「あのな、何も俺だつて好きでこんな事やってんじゃねえんだぞ。  
皆にムリヤリやらされてんだ。何が悲しくて、お堅い生徒会活動な  
んかせにやらんのだ。勘弁してくれよ、まったく。」

そう言つて俺はハアと溜め息をついた。「あらら・・・、そりゃ災  
難だったわねえ。まあアンタらしい理由だけだ。」

「どういう意味だよ！」

聞き捨てならない俺はすかさず鋭いツツコミを入れる。

「あ、あのう。」

不意に宵子ちゃんがおずおずと口を開く。

「ん、なあに宵子ちゃん。」

「藤原さんは、どうして生徒会に入ろうと思つたんですか。」

「アタシ？アタシはねえ、目立ちたいからよ。アタシ、人より目立  
つ事が好きなの。いつかは生徒会長になって人の上に立つて目立ち  
たいわね。」

何とも壮大な夢である。もしもコイツが生徒会長になったら、きっ  
と俺は学校に行きたくなるだろう。そんな事を考えていた。

「私、初めてなんです。」

「えつ。」

俺と藤原が同時に聞き返す。

「は、初めてなんです。自分の意志で決めたの。い、いつも人に言  
われるままでした。人に決められて、自分で動き出した事なんてな  
かった。進路も、勉強も親の言いなり、幼稚園に入る前に受験もし  
ました。でも、もう人に言われるまま、決められるままは嫌なんで  
す。わっ私も、自分で動きたいんです！」

俺と藤原はただ黙って彼女の話を聞いていた。

初めて他人に自分の本音を漏らした。彼女の心の声にずっと耳を傾



けていた。

「ただいまー。」

家に着くと、中2の姉貴がいた。

「おかえり。遅かったじゃない。」

「涼子姉ちゃん、実は今日さ生徒会の集まりがあつて。」

「アンタが生徒会！？ちよ、お兄ちゃんー！！大変よ！葵が生徒会やつてるんだつて！今夜は赤飯よ！」

（オイオイ・・・）

何とも失礼な話だが、涼子姉ちゃんは俺が生徒会活動をやる事にヒドク驚いたらしい。

奥から高2の兄貴、太一が出て来た。「ほー、お前が生徒会か。コリヤあの学校も、ついに学校としての役割を放棄したかな。」

「どつという意味だよッ！」

「でも本当に凄いいじゃない。おめでどう、葵。」

兄貴の横で高三の長女・美智瑠が言う。

「葵。これから貴方がする事は、皆の為にも自分の為にもなる素晴らしい事なのよ。大丈夫、貴方なら出来るわ。」

「美智琉姉ちゃん。」

美智琉姉ちゃんはさすが長女だ。言う事が違う。

「あの葵が生徒会とはねえ、まっ頑張んなさいよ。」

「サンキュ！涼子姉ちゃん。」

「さて、涼子。赤飯炊くぞ。ウチのバカ大将が事欠くに生徒会なんぞに入つちまつたんだ。へましない内に、盛大に祝おうぜ。」

（いやいや、兄貴。いいから、赤飯炊かなくていいから！）

「あら、太一。今日の晩御飯の当番って貴方じゃなかった？」

「やつべ！忘れてたー！」

「もうッ、お兄ちゃんー！！！」

「バカ兄貴！」

こうして普段通り夜は更けていく。

#### 第4話・コンビ結成！編

「スヤスヤ・・・」

（はあく、やっぱり寝てる時が一番幸せだよな。ムニヤムニヤ・・・）

チユンチユン

（うーん、スズメが鳴いてるのか。もう朝か。）

「葵！起きないと！遅刻しても知らないわよ。」

次女涼子が起こしてくる。

「早く起きなさいって。ホントに遅刻するよ！」

（仕方ない。そろそろ起きるか。）

「分かったよ。ふああーあ。」

気の抜けたアクビを一つして、のそりと布団から下りる。ふと枕元にある時計を見ると時刻は8時15分を指していた。

「あ”アアアアアー！！”」

「キャツ！ちよつと何よイキナリ、ウルサイわねえ。」

俺の声に驚いたのか、涼子姉ちゃんは怪訝な顔をして聞いてきた。

「明日は朝8時に集まってくれ。皆よろしく。」

頭の中で昨日会長が言った言葉をハッキリと正確に思い出す。

「ヤベエ！遅刻だ！姉ちゃん、俺もう行くよ！」

「ちよつと葵！？ご飯ぐらい・・・」

「いらないっ！」

姉ちゃんの手を振り、急いで着替えて部屋を飛び出した。

8：00 生徒会執行部室

一方、生徒会室では早朝の活動を始めようと執行部員達が集まっていた。一人を除いて。

(あのバカ・・・)

いつまで経っても来ない葵に心配を隠せないのは、同じ5年生部員の藤原奈美。

「あつあのお、橘君。遅いですね。今日の事、忘れてるんじゃないでしょうか。」

心配そうにして話したのはもう一人の5年生部員飯野宵子

「かもね。とにかく、執行部に入って早々の遅刻はマズいわ。激マズよ。」

焦る奈美。

「さて、皆朝早くに集まってもらってすまない。今後は今日みたいに朝活動する事があるかもしれないから、5年生はその所よろしく頼むよ。」

生徒会長の菅野裕也が一同に告げる。その時誰かが声を発した。

「会長。」

「何だい、里沙」

副会長の坂本里沙だ。

「橘葵君がまだ来ていないみたいだけれど。」

「そのようだね。」

苦笑いしながら裕也は言う。

「フッフ寝坊、かしらね。」

3人目の6年生部員の青嶋史恵が正に的確な答えを言った時だった。「冗談じゃないわ。私達は生徒会執行部なのよ！？就任早々遅刻するなんてどうかしてる。全く、やる気を疑うわ。」

ついにイライラを爆発させたのは里沙だった。

「まあまあ落ち着けよ、里沙。橋は今日は来れない理由があったのかも知れない。誰か彼から聞いてるかい？」

その場にいた全員が言葉や態度で否定の意思表示をした。

「やれやれ、まいったな。正当な理由のない遅刻は困るんだけどな。仕方ない、時間が勿体ないから早速活動を始めよう。」

こうして、葵を欠いたまま生徒会執行部の活動は始まった。

その頃葵は

「だぁー、やばいやばいやばいやばい！完っ全に遅刻だよ。」

元々足の速い葵だが、さすがに瞬間移動は出来ないらしく、少しでも早く学校に着くべく必死に走っていた。

「ハアハア、だーちくしょう！ポンポいてーよー。」

「遅れてスンマセー！って、アレ？」

必死の形相で生徒会室に駆け込んだ葵だったが、既に中で活動が行われている気配は無かった。

「???つかしいな。」

「おかしいのは君の方よ。」物陰から声がする。「えっと坂本、先輩。」

そこにいたのは副委員長の坂本理沙だった。

「やってくれたわね。一体どういつつもり？やる気がないのなら今スグ辞めてもらえるかしら。」

「いやその、スミマセン。」

「言い訳する気もなし？それとも、言い訳する理由がないのかしら？」

言い訳など出来るハズもなかった。ただの寝坊なのだから。

「スミマセン。寝坊しました。」

「寝坊ですって！？……。分かってないみたいだから言っておくけれど、私達は生徒会役員なのよ。君からはやる気が感じられない。そんな事ならいつ辞めるべきだわ。」

「スミマセン。でもやる気がないわけじゃないんですよ。」

「私にはそうは見えないわね。」（オイオイ、オツカねえ先輩だな。）

「ん？何か言った？」

「いやいやいや！何も言っていないス！」「とにかく、君にはがっかりよ。」

「スミマセン。」

「もうそれ位にしてやったらどうなんだい？理沙。」

葵に助け船を出した声の主は、いつからそこに居たのだろう、会長菅野だった。

「会長、でも。」

「初日からクビにしてどうする。ただでさえウチは人数が少ないんだ。それこそ生徒会が潰れてしまうよ。」「しかし、彼の態度は見過ごせないわ。今年は私達にとって大切な年のハズよ。彼のような人と一緒にやっていくなんて、ナンセンスだわ。」

（ナンセンスって何ダロ？）

俺はふとそんな事を考えていた。その時だった。

「じゃあこうしよう。理沙、橘は君が直属の上司となって指導するんだ。そして納得の行くまで彼をシゴキ上げればいい。それなら文句はないだろう？」

「……………」

「えっ？あの、会長？」

「いいわ。彼を真つ当な生徒会役員に育ててみせるわ。」

「ちよつあの、えっ？」

全く何が何だか分からない。俺がナンセンスについて考えている間に、話がとんでもない方向に飛んでいるみたいだった。

「よし！決まりだね。」

「あのく、もしもくし。」

「橘葵君！」

坂本先輩が俺を見つめる。

「はっはい。」

「君のその腑抜けた根性、叩き直してあげるわ。覚悟なさい。」

「……………はい。」

( やっぱり、生徒会なんてやるんじゃないやなかつたー！！ )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6840a/>

---

葵のだらだら日記。

2010年10月18日20時48分発行